

『金竜帝アルファと初恋の花嫁』

著：かわい恋

ill：兼守美行

数人の侍女が「失礼いたします」と言っ羞てヨルネスの服に手をかける。

「あの……」

困惑して体を引くと、侍女は静かに頭を垂れた。

「ヨルネスさまの身支度を整えるよう申しつかっております。湯浴みとお着替えをお手伝いいたします。お着替えがお済みになりましたら、化粧と髪結いを」

美しく髪を結い上げることは自分ではできないが、湯浴みや着替えは手伝ってもらう必要はない。

「湯浴みは自分でできます。人に肌を見せる習慣がありません。一人にしていだけないでしょうか。服を着たらお呼びします」

「焼けた石もあって危険ですので」

風呂場の奥を見ると、木の扉のついた小部屋があった。ヨルネスのいた神殿にあったのと同じ、蒸気を発生させて汗を流す方式だろう。

「使い方はわかっております」

「決して目を離さぬようにとのご命令です。なにとぞご容赦を」

城の人間にしてみれば、ヨルネスは金竜帝の妃として連れてこられた人間。万一のことがあったら首が飛ぶかもしれないのだから、慎重になるのは仕方がない。彼女たちも自分の仕事をしているだけなのだ。困らせたくはない。

「わかりました。ですが、湯浴みの手伝いは無用に願います」

神殿に勉強をしに来る子どもたちと風呂に入るとき以外、ヨルネスが人前で裸になったことはない。しかも成人女性の前でなど。

服を脱ぐと、羞恥に駆られた。

侍女たちは慣れているのか、ヨルネスの裸を見ても眉ひとつ動かさないのはありがたかった。

なんでもない顔をしてタオルで腰回りを隠し、侍女を伴って小部屋に向かう。扉を開けると、熱い空気がむわっと体を包んだ。

「はあ……」

雪解けの季節とはいえ、まだ外気は冷たい。焼けた石に水をかけて上がった、熱い水蒸気を浴びて汗をかくのは気持ちよかった。

小部屋から出ると、冷たいお茶を手渡された。礼を言ってありがたく受け取り、ひと息に飲み干してから水風呂に体を沈めた。

(気持ちいい)

目を閉じて水に体を預け、火照った体を冷やしてから髪を洗う。地肌に香油をつけ、櫛で丁寧に梳いて汚れを落とした。

すっかりきれいになると、用意されていたやわらかな絹の服を纏う。羽のような手触りの極上の絹は、薄くて肌が透けてしまっている。

恥ずかしかったが、ここではこれが普通なのだろうと思って我慢した。

髪を結われ、白粉をはたかれて唇や目尻に紅を塗られる。年のいった男性オメガが化粧など滑稽だと思うと、逃げ出したくなった。

侍女が筆を置くと、ほう……、というため息が周囲から上がった。

「大変お美しゅうございます」

信じられない。鏡を見せられたが、やはり自分の目には不似合いに華美な化粧にしか見えなかった。

それから椅子にかけたまま何人もの侍女に丹念に脚や腕、肩などを揉まれ、体をほぐされた。体の心地よさとは裏腹に、着々と妃としての準備が整っていくのを感じて、落ち着かなくなってくる。

性交がどのようなことをするのか、書物から得られた知識だけはある。だが自分は男性の体を持っているとはいえ、自慰の経験もない。起床時や疲れたときに陰茎が張ることはあるが、それで快樂を得たこともない。十年も前に初病で体が疼いただけである。

(男性器を、受け入れる……)

挿入し、射精する。字面で追えば単純な行為。けれどそれを自分がされると思うと、想像が追いつかなかった。

悶々と時間を過ごし、夕餉ものどを通らず、旅の疲れで体が重くなってきたとき、部屋の外から別の侍女が入ってきてヨルネスの前に膝をついた。

「皇帝陛下のお越しでございます」

一気に緊張し、立ち上がって姿勢を正した。

あらかじめ命じられていたのか、侍女たちは一人残らず部屋を出て行ってしまった。

静かな室内に、どっどっどっ……、と自分の心臓の音がこだましている気がする。部屋の入口のドレープカーテンの向こうに男の足が見えた瞬間、ひゅっと息を呑んだ。

(ルーフェン……?)

どう見ても大人の男の足。当たり前だ、ルーフェンはもう二十歳の立派な大人だ。でも……、でも……、頭が追いつかない!

「ヨル」

高い少年の声とはまったく違う、重い大人の声。カーテンを開けて現れた男の姿に、目を瞠った。

部屋に入ってくるなり存在感に圧倒されそうになる長身。長衣を着ていても筋骨たくましい体つきであることが容易に知れる。少年の頃の面影をすっかり打ち消すような男らしい鼻筋から唇、顎の線。前髪を上げて理知的な額が見えているせいで、そこだけは変わらない碧色の瞳がはっきりとヨルネスを捉えた。

「ヨル、会いたかった！」

今や金竜帝となったルーフェンは喜色に顔を輝かせ、大股で歩いてくるとヨルネスを力強く抱きしめた。

「ヨル……、ヨル、どれほどこの日を待ちわびたか……！ ああ、あなたはこんなに華奢だったのか？ 俺が小さかっただけか。あの頃のあなたは、とても大人に見えていたのに」

そしてヨルネスを抱いたまま、うっとりとした瞳で顔を覗き込みながら頬を撫でた。

「化粧なんていらなかったのに。でも俺のために装ってくれたのだな。嬉しい、ヨル。あなたはちっとも変わらない。なんて美しい……」

大きく硬い体を持つこの男性は、知らない人間のような。自分の記憶の中のルーフェンと重ならなくて、恐怖すら感じる。

「離して……ください……、陛下……」

鉄の板のような厚い胸を押しても、びくともしない。ルーフェンは悲しげに眉を寄せた。

「ルーフェンと呼んでくれ」

「できかねます。今のあなたさまは皇帝陛下、金竜帝でございます。あのときとは状況が違います」

「あなたは俺の妻になる人間だ」

妻とは正妃を指す言葉である。公の場で皇帝の隣に立つことのできる唯一の妃。その他大勢の妃とは別格の存在だ。ヨルネスの意思を無視してルーフェンの中では確定事項なのかと思うと、苛立ちが心を波立たせた。

「勝手に決められても困ります」

そう言うと、ルーフェンは碧い瞳を見開いた。

「そのつもりでここへ来てくれたのではないのか？」

「一介の神官が、皇帝の命に逆らうことができますでしょうか。あなたさまはわたしを権力でここへ呼び寄せたに過ぎません」

ルーフェンは両手でヨルネスの上腕をつかむと、真剣な表情で瞳を覗き込んできた。

「あなたを好きでいていいと言ってくれたら？」

「人の心を制限することは誰にもできないと言っただけです」

はっきりと覚えている。

幼い恋心を否定することも肯定することもできなかった。心が自由なのは真実だ。身分も性別も関係ない。ただ、時が忘れさせてくれると考えたのは浅はかだった。

ルーフェンは奥歯を噛みしめるような表情をすると、ぐっと眉を寄せた。

「この十年、あなたを妻に迎えることを目標に頑張ってきた。あなたも俺を待っていたから、独身を通していたんじゃないのか」

「機会がなかっただけです」

年頃になったヨルネスに、誘いや見合い話がなかったわけではない。だがヨルネスにとって村人はみな等しく愛おしく、若い男女であっても性愛の情は抱けなかった。

「では運命だ。あなたは俺の妻になる運命だった」

情熱的な言葉と強い眼差しに、心臓が跳ねた。

「……今まで手紙の一通もなく、突然そんなことを言われても」

「あなたへの手紙は父上に禁じられた。そうすれば俺があなたを忘れて諦めると思ったのだろうな。とんでもない。伝えられぬ想いはいっそう強く俺の心を焦がした」

碧い炎が燃えるような瞳とうっすら笑った口もとが、ルーフェンの長い執念を表しているようでぞくりとした。

「毎夜あなたに焦がれて焦がれて……、夢で何度も口づけた。いつかあなたを迎えに行くと、それを支えに誰からも文句を言われぬ皇帝となるべく力をつけてきたのだ。やっと……、やっとあなたを手に入れられる、ヨル……！」

「あ……！」

ぐいと腕を引かれ、赤子のように軽々と抱き上げられる。すぐに大きなベッドの上を下ろされ、上から覆い被された。むしゃぶりつくように首筋に口づけられ、大きな体の下で暴れた。

「や……、待って……、待ってください……！」

こんな急に！

ルーフェンはヨルネスの鎖骨に歯を立てながら、暴れる体を押さえつけるように薄衣の下に手を差し入れて肩をベッドに押しつけた。

「待てない。そんな閨衣と夜化粧で同意を示しておきながら、今さら拒むのか！」

「これは……、んっ、んう……っ！」

自分の意思で選んだ衣装ではないと言いたかったが、激しく口づけられて言葉を封じられた。厚い舌が口腔を蹂躪する感覚に頭が熱く曇る。

濡れた生きもののような塊が縦横無尽にヨルネスの口内を動き回る。舌同士をすり合わされれば唾液が溢れ、混じり合って口端から零れた。

歯列に沿って舌先で撫でられる初めての感触に腰が痺れる。拒絶しようと閉じた唇を噛まれれば小鳥のように震えてまた開いてしまい、好き放題に舐めつくされた。

「は……、ああ……」

呼吸が満足にできずに頭がぼうっとして、いつ唇が離れたのかわからなかった。

なんでこんなことをされるのだろう。口づけとは、唇を触れ合わせるだけの行為ではないのか。少なくとも、自分の見たことのある口づけはそうだった。結婚の誓いにしても、酔った恋人同士が人前で戯れるにしても。それともルーフェンだけの特別な趣味なのか。

涙の滲むとろりとした目でルーフェンを見上げると、半開きになった唇を親指の腹で拭われた。

「きれいだ……、ヨル……」

いつのまにかはだけられていた胸に、ルーフェンの唇が吸いつく。

「ふあ……、あ、あ……」

右の胸芽を唇で覆われ、舌で弾かれてびくりと体を揺らす。

そのまま赤子が母の乳を吸うようにじゅっじゅっと音を立てて吸い上げられ、弓なりに反らせた背をベッドから浮かせながら身悶えた。

「あなたの肌は、とても甘い」

舌の腹で下からべろりと乳首を舐め上げながら言われ、むず痒い感覚と羞恥に下唇を噛んで横を向いた。

抵抗などできようはずもない。ヨルネスは体を与えるために連れてこられた。納得はしていないが、自分でもそれを承知している。ルーフェンが満足して終わるまで待つしかない。

ルーフェンの手で閨衣を開かれ、ヨルネスの肢体が露わになる。羞恥に思わず目を閉じた。

けれど視界を塞げば十歳のルーフェンの顔がまぶたの裏にちらつく。

あの子と……、あの無邪気な子とこんなことをしている——。

子どもと不埒なことをしているような罪悪感で胸が潰れそうで、閉じていられずに目を開いた。嫌でもルーフェンの姿が飛び込んでくる。大人の彼と子ども時代が噛み合わず、頭がついていかない。

「あなたの肌はまるで新雪のようだ。どこもかしこも淡い色をして……」

言いながら、吸われたせいでうっすら色づいて屹立した乳首を指で撫でる。二本の指で粒を際立たせるようにつまんで引っ張られ、ちくんとした甘い痛みに腰が勝手によじれた。

「感じてくれているのか、ヨル。嬉しい」

感じている？

わからない。刺激を受けたのは胸なのに、なぜか陰茎がむずむずするような……、これが感じるという感覚なのか。

ルーフェンは引き寄せられるように再びヨルネスの胸に唇を寄せる。

「ヨル」

「ああ……」

ルーフェンの舌が複雑に動いて、まるでそれに味がついているように小さな粒を余すところなく味わっている。

どうして早く挿入と射精をしない？ なぜこんなに体を弄るんだろう。性交するつもりなら早くそうすればいいのに、ヨルネスが抵抗したことに腹を立てて、罰を与えるために辱めているのか。

反対の胸を大きな手のひらで包まれ、膨らみもないのに揉まれた。右の乳首ばかり執拗に弄られて、放置されていた左が待ち構えてでもいたかのように、指でつままれただけで鮮烈な刺激に腰が跳ねた。

「あああ……っ！」

思わず自分にのしかかるたくましい肩を押し返そうとしたが、ヨルネスの反応に興奮したのか、舌遣いが一段と激しくなる。

「やあ……っ、だめ、やめて……！ へん……、変なんです、体が……！」

陰茎がずくずくと甘く痛んで、触れなくなってくる。胸が切なく疼いて、悲しくもないのに泣きたくなってきた。

「変じゃない。感じているだけだ。初めてなんだろう？ こうして男に体に触れられるのは」

男性にも女性にも、こんな触れられ方はしたことがない。

「初めてだと言って、ヨル」

乳首に軽く歯を立てられ、たまらず小さな悲鳴を上げた。

「は、初めて……、です……！　こんな……！」

ルーフェンは満足げに、また口全体で乳首を覆うと、じゅうと吸い上げてきた。胸の奥から切なさと一緒に吸い上げられるようで、勝手に吐息が零れる。

ルーフェンは体温の高い手のひらでヨルネスの脇腹をなぞりながら、唇を下へ這わせていった。やっと解放された乳首がぬめぬめと赤く光っていて怖い。この小さな器官は、こんなに色が変わって勃ち上がるものなのか。醜い。怖い。

唇が下へ下へと移動していき―――。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>